

国史跡

KAMATSUKA

# 釜塚古墳

第3次発掘調査概要

前原市文化財調査報告書

第81集



空からみた釜塚古墳  
2002年2月14日撮影

2003

前原市教育委員会

## はじめに

釜塚古墳は西日本屈指の大きな円墳です。

古墳からJR加布里駅まで100m。一昔前、山裾の水田中に荘厳な佇まいをみせる古墳は駅のホームからよく見え、車窓から見える古墳の姿は歴史のまちな前原を印象づける筑肥線の風物詩でした。時をさかのぼること1600年。古墳が作られた当時、前面には玄界灘に続く静かな内海が広がっていました。当時の糸島はわが国と大陸との交流拠点。当地を往来する船にとって釜塚の巨大な墳丘は糸島に到着したことを知る標となったことでしょう。釜塚は今も昔も当地を象徴する記念物だったのです。

近年の都市化により古墳の周囲の眺めは一変しましたが、大きな墳丘は変貌を遂げてゆく糸島の未来を暖かく見守ってくれることでしょう。

平成13年度に行った発掘調査では、釜塚古墳の新事実が次々と明らかになり、その重要性を改めて認識することとなりました。

本書は、最新の釜塚古墳情報をみなさんにお伝えすることを目的として刊行しました。本書が当地市文化財の理解、保護思想の普及啓発のお役に立てば幸いです。

平成15年3月31日

前原市教育委員会  
教育長 菊竹利剛

## 例言

1. 本書は平成13年度に実施した国史跡釜塚古墳の発掘調査概報である。
2. 出土遺物の実測は、牟田幸代子の協力を得て岡部裕俊が行なった。また、遺構、遺物写真の撮影は岡部が行なったが、現場の空中写真撮影は(有)空中写真企画に委託した。
3. 本書の執筆分担は、Ⅱ-3を鈴木三男、小川とみ(東北大学大学院理学研究科付属植物園)岡先生に玉稿を賜り、他は岡部が行なった。また、編集は岡部による。
4. 本書の報告内容は資料整理途中での認識であり、今後資料の整理過程で修正を加えることもあるので、あらかじめご了承ください。
5. 表紙の航空写真は西谷正九州大学名誉教授に御提供いただいた。また、裏表紙の写真、本文写真2は「埋文写真研究」別冊(1995年刊 1950年10月高橋猪之介氏撮影)から関係各位の御了解を得て転載させていただいた。記して感謝の意を表します。

## 目次

I. 釜塚古墳の位置と歴史的環境	1
II. 調査の記録	
1. これまでの経過	2
2. 調査の概要	
(1) 調査経過	3
(2) 墳丘と外部施設	4
墳丘(4) 外堤(5) 墓石(6) 周濠・渡り土堤(7)	
(3) 出土遺物	8
木器(8) 埴輪(9) 土師器(11) 弥生土器(11)	
3. 釜塚古墳出土石見型木製品の樹種について	12
III. おわりに	13

# I. 釜塚古墳の位置と歴史的環境

釜塚古墳は前原市の西北端、大字神在405番地に所在する円墳である。宮地嶽（標高118m）から北西に向かって派生した2本の尾根に挟まれた標高3～5mの段高地上に位置する。

釜塚古墳の北に広がる水田、住宅街は主に江戸中期以降に陸化開田された干拓地である。おそらく古墳時代には長野川の河口は釜塚古墳の西方にあり、古墳のすぐ近くまで内海（古加布里湾）が入り込んでいたものと推定される。内海はさらに東に湾入し、当地方の拠点集落である三雲・井原遺跡の北4kmまで達する。釜塚古墳はこの深く入りこんだ湾の入口部にそそぎこむ長野川の旧河口に位置している。

長野川下流には釜塚のほかにも玄界灘沿岸では最大の前方後円墳とされる一貴山鏡子塚古墳（4世紀後半・墳丘長103m）や、周溝、外堀を備えた東二塚古墳（5世紀後半・墳丘長45m）など、糸島地方の首長系諸上に名を連ねる重要古墳が分布しており、古墳時代における当地域の重要性を物語る。

釜塚古墳に近い東下山遺跡では陶質土器や水鳥型土製品が、神在横畠遺跡からは韓式瓦質土器が、また、二丈町の深江井牟田遺跡からは楽浪系漢式土器や陶質土器が多数出土しており、当地域で朝鮮半島との活発な経済・文化交流が展開されていたことがうかがわれ、釜塚古墳の立地、築造背景を考える上で重要である。

また、長野川は糸島地方西部で最大の河川である。流域には広大な平野はみられないものの、豊富な水量を誇り、現在は川付地区から本、瀬戸地区を經由して、隣りの深江平野東部の灌漑用水としても利用されている。この水利用の起源がどれほど遡るのかわからないが、かりに古墳時代まで遡るとすれば、長野川は当該地域一帯における灌漑用水の中心的な供給源としてその重要性を増し、長野川水系の首長の動向が糸島地方西部の首長権の動態に大きく影響を与えた可能性が高くなり、注意を要する。

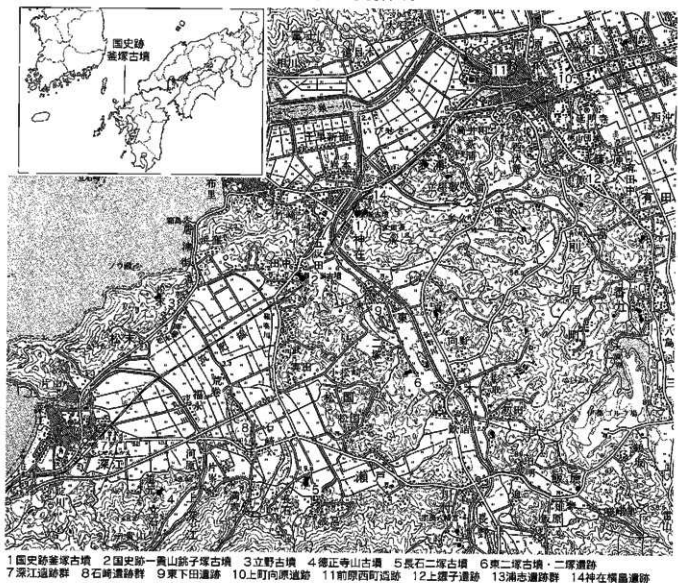


図1 釜塚古墳の位置と周辺の主な古墳、弥生～古墳時代の集落遺跡の分布 (1/50,000)

## II. 調査の記録

### 1. これまでの経過

釜塚古墳は今回の調査を含め3次にわたる調査が実施されている。釜塚古墳の発見からこれまでを簡単に振り返る。

#### 古墳資料の初出（昭和2年）

昭和2年に刊行された「糸島郡史」「加布里村」の史蹟・名勝欄に「釜塚」として記載されており、明治18年頃、石室が発掘され、朱を塗めた石椁様の棺と鐵2個が出土したとされる。鐵の詳細やその後の経過、所在については不明である。

#### 第1次調査（1978年11月）

隣接地において町営団地（現市営神在団地）の建設が計画されたため、これに先立ち古墳の墳丘規模を確認し、保護を図ることを目的として故原山大六、大神邦博両氏を調査員とする発掘調査が実施された。

古墳の南側に3本、東側に1本の計4本のトレンチ調査が行われ、その結果、墳丘は現在よりも一回り大きい直径54～56m、幅7.2～7.8mの周濠の存在も明らかとなった。堀からは瓦石も確認された。総じて周濠を含めた古墳の直径が72mに達する北部九州屈指の円墳であることを確認した。

#### 第2次調査（1980年10月）

墳丘の確認、主体部の横穴式石室の調査が実施された。横穴式石室は薄い割石を平積みして築かれており、玄門には両袖に平石を立て前壁としている。羨道は短く、頂上に向かって急角度に上昇する墓道がとりつく古式の横穴式石室であることが判明した（図2、裏表紙写真）。

#### 国史跡指定（1982年5月）

北部九州屈指の規模を誇る円墳であることに加え、主体部の横穴式石室はわが国における初期横穴式石室の変遷過程を探る上で貴重な古墳であるとして国史跡に指定された。

#### 第3次調査（平成13年11月～平成14年3月）

第3次調査は、隣接する市営神在団地の建替え計画に先立ち、古墳を囲る周濠の形態、範囲および外堤の有無を確認し、古墳の保存と将来の整備に向けての資料収集を目的として行なった。

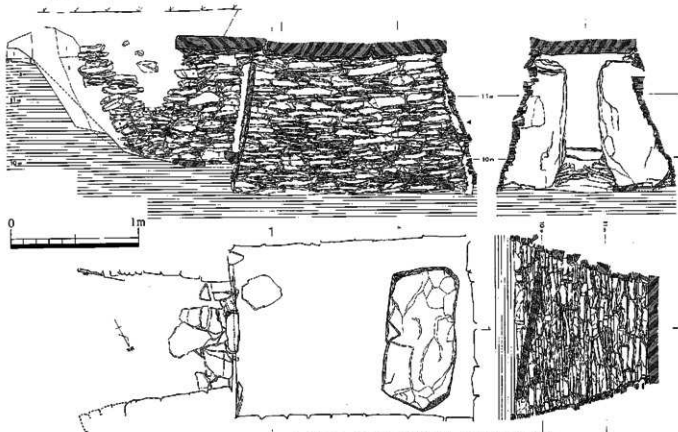


図2 釜塚古墳の横穴式石室実測図（1/60・「釜塚」1980から転載）

## 2. 調査の概要

### (1) 調査経過

釜塚周辺は、標高3～5mの微高地上に位置する。背後には宮地嶽（標高118m）から派生する谷が迫り、長野川の氾濫原に近いこともあって地下水位が高く、1、2次の調査の際にも湧き水に悩まされている。

また、古墳周囲は昭和40年代に真砂土と川砂で埋め立てられていて、場所によっては遺構面が現地表から1.5～2mの深さに達する。調査にあたっては、廃土を含め、土砂災害等に十分な注意が必要となった。

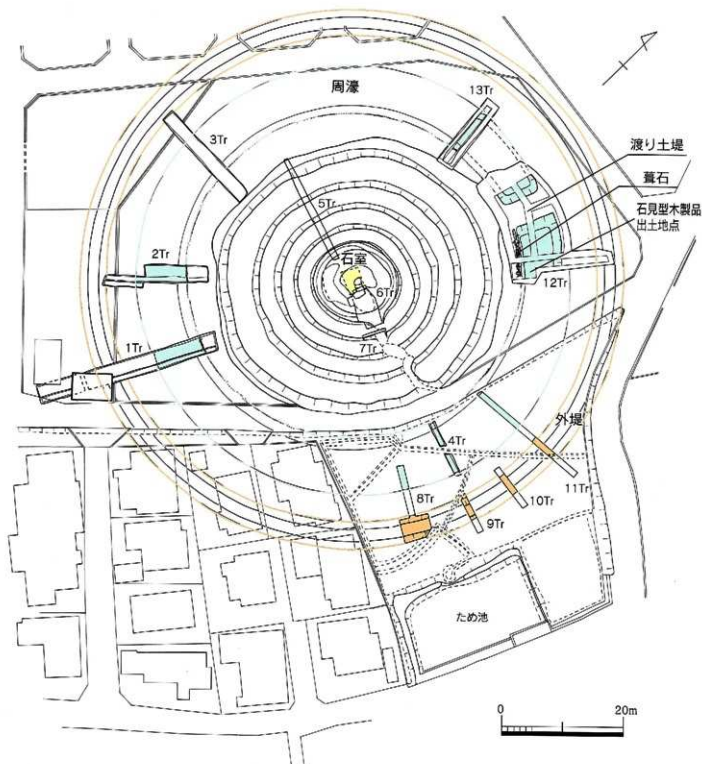


図3 釜塚古墳の発掘調査地点と周濠、外堤範囲想定図 (1/600)

調査では、まず、古墳に隣接する東側水田に放射状に8～11トレンチを設定した(写真3、図3)。いずれのトレンチからも、水田面下1m前後で盛土と地山整形による土手状遺構を検出したため、その性格、延長方向を確認するため、指定地内に新たに12、13トレンチを設定し、引き続き調査を行なった。

12トレンチでは、土手状遺構は検出できなかったものの、増丘裾では比較的良好に遺存する葦石を検出し、東に調査区を拡大したところ、周濠底面からはほぼ完形の石見型木製品が出土した。また、西側の拡張区では周濠が途切れ、さらに西に拡張したところ、幅7mの渡り土堤が確認された。

13トレンチでは周濠を検出し、幸うじて基底部が残った葦石も確認し、より正確な増丘、周濠、周濠規模の復元に役立った。

2月23日には市民を対象とした現地説明会を実施し、調査を終えた後、埋め戻して原状に復している。

なお、調査にあたっては多くの先生方に御指導いただいた。記して感謝の意を表したい。

西谷正(九州大学)、土生田純之(専修大学)、鈴木三男、小川とみ(東北大学)、柳沢一男(宮崎大学)、上原真人(京都大学)、山崎博之(愛媛大学)、石野博信(徳島文理大学)、佐古和枝(関西外国語大学)、菅谷文則、高橋美久二(滋賀県立大学)、橋本達也(鹿児島大学)、町田章(独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所)、豊岡卓之、鈴木裕明(奈良県立橿原考古学研究所)、柳田康雄(九州歴史資料館)、横口達也、池辺元明、佐々木隆彦(福岡県教育委員会)



写真1 釜塚古墳の全景(直上から)



写真2 釜塚古墳の墳丘（北から 1950年）

## (2) 墳丘と外部施設

### 墳丘

昭和40年ころみかんの苗木を植えるために段々畑に手開墾されたため、現在は5段茶成のピラミッド状に見える。しかし、大正末期までは溜り鉢を伏せたような美しい墳形であったことが『糸島郡史』に掲載された墳丘写真で確認できる。残念ながら印刷が不鮮明で墳丘の詳細についてはわからない。

昭和25年に撮影された写真（写真2）を見ると、当時すでに墳丘に茶の木が植えられ、開墾の手が加えられているもの、墳裾から1.5～2m、4～5mの2ヶ所に傾斜変換線が認められる。段茶のテラス面の残存地形と推定され、本来3段築成であった可能性が高いと考えられる。

しかし、第2次調査の際に行なわれた墳丘西斜面におけるトレンチ調査（5トレンチ）では、墳丘の著しい改変のため詳細は明らかにできてはいない。今後の検討課題である。

### 外堤

8～11トレンチで墳丘を中心に長さ30mにわたって弧を描いてめぐる断面台形を呈する土手状遺構を確認した。

トレンチによって遺存状態が異なるが、周濠との関係把握ができた8トレンチでは、遺構の上半は青色、白色、灰色粘土を築き詰め、下半部は地山を削り出して土堤状に構築されている（写真4、図4）。8トレンチでは土堤状遺構の幅は裾部で5.0m以上、現存高は40cmを計る。

11トレンチでは盛土層が薄く観察できたにとどまり、地山整形の痕跡も不連続となっていた。さらにその延長方向を確定するために、指定地内に12トレンチを設定したが、想定箇所では



写真3 8～11トレンチ設定状況

遺構を確認することができなかった。

土手状遺構は墳丘を中心に円弧を描いており、8トレンチの土層観察では土手状遺構の基底面となる地山整形面が周濠の掘り方と同一遺構面であることが明し、古墳と同時期に築かれた遺構であることが確認できた。

また、盛土に用いられた粘土は、釜塚墳丘下の地山の粘土によく似ている。

これらから、土手状遺構は周濠掘削時の廃土を利用して築かれた可能性が高く、古墳と一体的に配されていることから、古墳周囲に配された外堤と判断される。

外堤と周濠の間には幅5mほどの平坦なスペースが存在するが、ここは常時水に漬かった形跡はなく、外堤斜面も低くなため、保水目的とは考えにくい。

外堤が西側にまで延びていたのか確認できていないが、現段階では築堤の目的は周濠の保水管理ではなく、墓域を明示することであった可能性が高いと考える。外堤の外縁裾によって区画される古墳の墓域は直径およそ89mに達する。



写真4 8トレンチ外堤検出状況



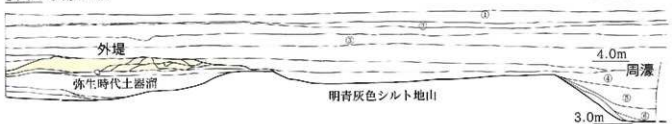
写真5 10トレンチ外堤土層断面

## 葺石

1、2トレンチで墳丘層に石列が確認されていたが、大きめの花崗岩塊石や板石が裾部に1列に並べ置かれた状態を呈していたことから、葺石というよりは墳裾を明示する列石と解釈されていた。

しかし、今回の調査では、12トレンチで比較的良好に遺存する葺石を確認した。人頭大の大きな板状の角石を多く用い、緩やかな勾配をとりながら表に平坦面を向けて貼石状に葺かれている。石積みは粗く隙間への小石の補填はない。

8トレンチ南壁土層



13トレンチ東壁土層



図4 8トレンチ外堤～周濠、13トレンチ周濠土層断面図 (1/60)



葦石は墳裾から50cm上方、標高3.2mラインあたりに幅30cmほどの狭いステップを削りだして積み上げている。

また、腰石は、浅い溝に落とし込んで、固定されている。

### 周濠・渡り土堤

1、2次の調査では幅7.5～7.8ほどの周濠が確認されていたが、南部の1、2、3トレンチでは遺存状態が悪く、深さは30～40cmほどであった。

しかし8、11、12、13トレンチでは周濠の深さは概ね70cmを越え遺存状態は良好であった。

周濠内の基本土層は下層に植物遺体を

多く含む暗茶褐色の粘質土層、中層に暗褐色・黒色の粘質土層、上層に灰黒色粘質土層の3層である(図4)。全般的に周濠内から出土する埴輪の量は少なく、本来、墳丘上にはさほど多くの埴輪は立てられなかったのかもしれない。

12トレンチでは周濠幅がやや西に向かって狭まったかと思うと突然途切れ、そこから外側周濠中に向かって地山を削り出して築かれた幅7mの渡り土堤が姿を現した。渡り土堤の横断面はなだらかな前坪状を呈しており、肩部～斜面～基底部の境が明瞭でない。地山層が軟弱な灰色砂質粘土層であったため、遺構面の土砂が流失したことも想定される。

現況では渡り土堤の高さは50cmほど。墳丘一段目の斜面中途、ちょうど葦石の基底部に繋がられている。



写真6 12トレンチ葦石

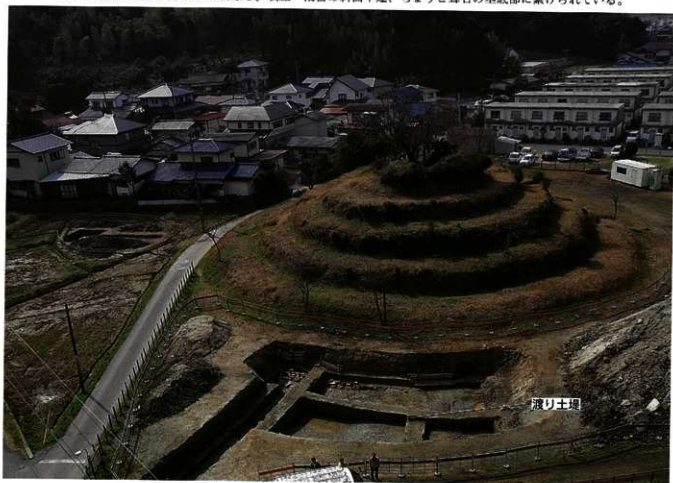


写真7 北から渡り土堤越しに墳丘をのぞむ

12トレンチ東拡張区の周溝下層から脚部を底面につけ、墳丘にもたれかかった状態で石見型木製品が出土した（写真8）。ほぼ完存し遺存状態も良好である。木製品の上面には藁などの水生植物遺体が厚く堆積しており、脚部は周溝底に接地していたことや、表面の遺存状況も良好で、顕著な風化・劣化の様子が認められないことから、木製品は使用後、間もなく周溝に転落ないしは投棄され、底に沈んだものと推定される。

### (3) 出土遺物

今回の調査では石見型木製品、組製品部材などの木器、円筒系埴輪片、弥生土器、縄文土器、石器、須恵器などが出土した。このうち、古墳に関連する資料を中心に概説する。

## 木製品

### 石見型木製品

クリの半截材を用いており、全長204.8cmを計る。各部の名称については鈴木裕明氏が用いられる名称（『権威の象徴—古墳時代の威儀具—』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館2000年）に従う。表飾部は長さ76.4cm、最大幅34.5cm、厚さ4.5～5.0cmを測る。第1、第2段帯は表側だけ厚く削りだして角状突起部と中央帯との境部に明瞭な段を有す。角状突起部の側縁部は2段にすぼまり、第1段帯の上縁はほぼ水平方向に張り出すのに対し、第2段帯の下縁はわずかに下方に垂れる。木製品の表面には線刻、彩色等の加飾は認められない。

柄部は長さ128.8cm、最大幅15.2cm、厚さは6～9.6cmを測り、節が残る中央部が最も厚い。この節を境に上半部では表面加工が丁寧で、隅角の面取り加工も施してあるのに対し、下半部は表面の加工が粗く、隅角の面取り加工は行われていない。また、下方に向かって徐々に厚みを増しており、表面に軽く炙った痕跡も認められる。基部を地中に埋設した際の強度を確保するとともに防腐効果をねらったものとみられる。



写真9 石見型木製品



写真8 石見型木製品の出土状況（裏面を上に向けて出土）

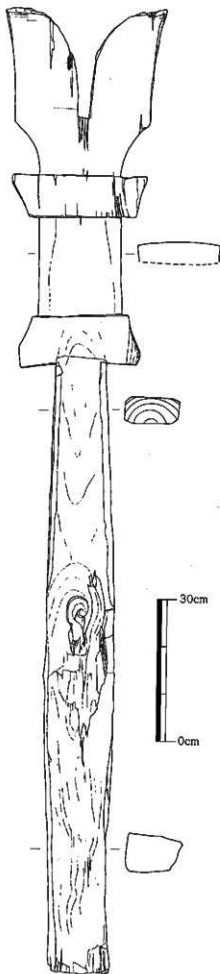


図5 石見型木製品実測図 (1/8)

### 組製品部材

渡り土堤の東北側部底面から10数枚の板材が折り重なった状態で出土した(写真10)。

材は形状によって3種に分かれる。最も多いのが厚さ2~3mm、幅3cmほどの薄板(図6-1~9)で9枚以上が確認できる。折れたり、途中で欠損しているものが多く、全体を把握できるものはないが、最も長い1は長さ87.2cm、ほぼ原形が推定できた5は長さ71cmを計る。板面の各所に小円孔が設けられているが、間隔は一定ではない。

納付板は3枚出土した。10は全長46.7cm、幅9.4cm、厚さ1.6cm。11は全長46.4cm、幅7.1cm、厚さ1.3cm、一方が出土時に既に乾燥収縮していた。12は一方が破損する。残存長29.2cm、幅9.3cm、厚さ1.0cmである。

残る1種は方形納孔付の板(13)で、全長102.4cm、幅6.2cm、厚さ1.2cmを計る。板には両端と中央部の合わせて3箇所に長方形孔があり、それぞれ寸法が異なる。両端とも先端に向かって薄くなり断面は尖る。

出土した3枚の納付板がこの方形納孔付板と「日」の字状に組み合わせて使用したのであれば、孔の寸法を手がかりに旧形の復原が可能である。

類似資料としては奈良県桜井市の小立古墳から出土した格子状木製品がある。

### 埴輪

周濠内から埴輪片が出土しているが、総量は少ない。第1次、2次調査成果とあわせて考えると、本来埴丘に樹立された埴輪の数はさほど多くなかったものと考えられる。

器種は円筒埴輪、朝顔形埴輪片が大半である。表面に丹塗りが確認されたものも数点出土している。

いずれも有黒斑埴輪で、タガの後は鈍く、焼きも軟質で遺存状態が悪い。

詳細は本報告に譲りたい。



写真10 12トレン組製品部材出土状況

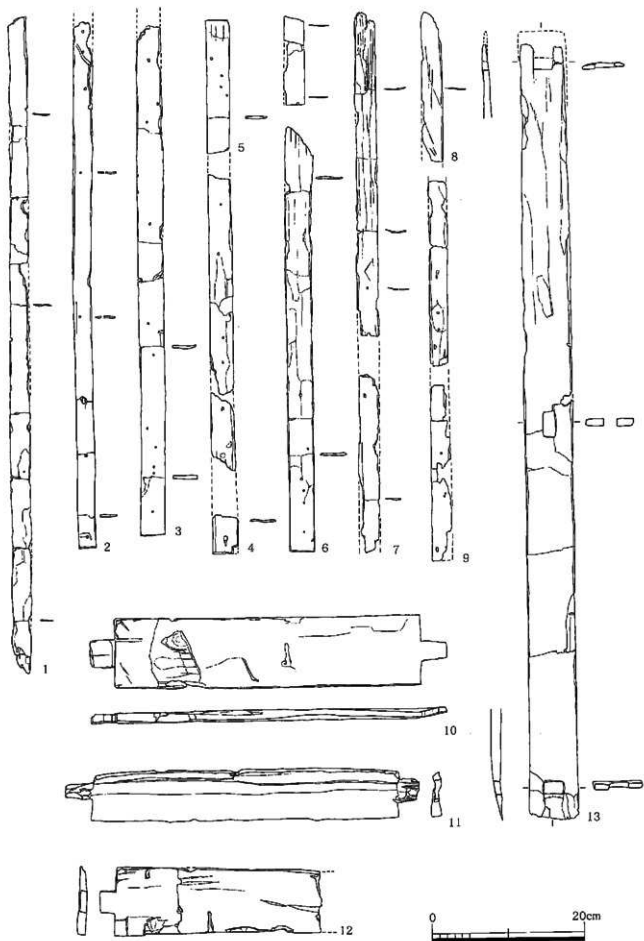


图6 組製品部材実測図 (1/5)

## 土師器

8トレンチ外堤の内側裾付近から土師器片が数点出土した(図7)。いずれも地山の直上から出土したことから、古墳の葬送儀礼に使用された可能性がある。いずれも口頸部の屈曲部が鈍くなっている。1は最も残りの良いもので、口縁部の3分の1ほどが残る。復元径15.5cm、2はやや口縁部がつくりがシャープである。

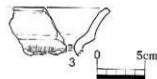
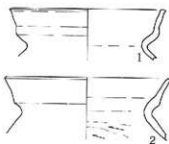


図7 出土土師器実測図

## 弥生土器

8トレンチで、外堤の断面観察のために掘り下げたところ、弥生時代後期の土器溜を検出した(図4, 写真11)。埋土からは弥生中期～後期の土器片が出土した。調査面積が狭かったため、その性格など詳細はわからなかったが、東端で拳大の礫とともに弥生後期の土器がまとめて出土した。

1、2は甕である。1は胴の中ほどで打ち欠かれる。口縁径 cm。口唇部は上方に軽く積み上げ。胴内面は横方向のケズリがみられる。3は壺である。球形の胴部は内外面ともハケ調整で仕上げる。口唇部外縁に粘土帯を貼り付けた痕跡が認められたが、剥離しており、皿形は不明である。4、5は高杯である。4は口縁が直立ぎみに短く立ち上がり、端部は外に張り出す。5は脚柱部下に大きな円孔が5方向に設けられている。

これらのうち、1、3、4は溜戸内地域の影響下の土器と考えられる。



写真11 8トレンチ外堤下土器溜弥生土器出土状況

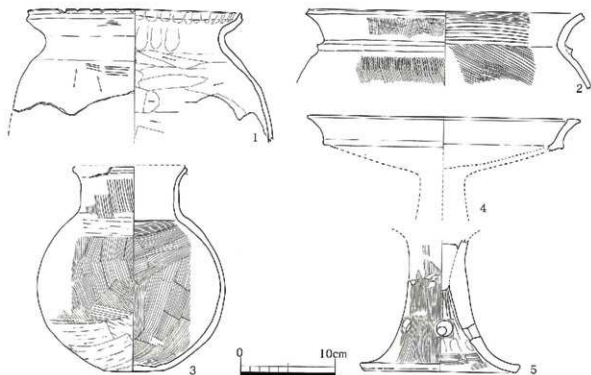


図8 8トレンチ外堤下土器溜出土弥生土器実測図(1/4)

### 3. 釜塚古墳出土石見型木製品の樹種について

東北大学大学院理学研究科付属物園

鈴木 三男

小川 とみ

福岡県前原市の釜塚古墳から出土した材の樹種を、横断、接線、放射の3断面の徒手切片を作成し、光学顕微鏡で観察した結果、クリ材であることが判明したのでここに報告する。

#### 出土材の構造

出土材は漆黒に着色していて、大変堅く、内部構造の保存は大変良い。

年輪が明確な環孔材で、年輪始めに楕円形の大きな道管が2-3層に配列し、そこから順次径を減じて晩材部では薄壁多角形の小道管が狭くまとまって火炎状に配列している。道管の穿孔は単一、側壁の壁孔は、丸みのある多角形で、交互状に配列し、らせん肥厚はない。道管-放射組織間の孔壁は円~楕円で小さい。晩材部では細胞内容物が抜けた木部柔組織が椀状に縦に配列している。放射組織は単列同性で背は高くない。

以上の形質からブナ科クリ属のクリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. と同定される。

クリは北海道道南地域から九州南部、それに朝鮮半島南半部に広く分布する落葉高木で、樹高30m、幹直径1mに達する。成長が早く、二次林、いわゆる雑木林によく生える。材はやや堅硬で割裂容易、耐朽性、特に耐湿性に優れる優秀な木材である。大材が得られるので、大型建築物の柱材や土台、各種器具をはじめ、ありとあらゆる用途がある。また、特に耐湿性と耐朽性に優れているので、土木用材、木造りの橋、鉄道枕木などに用いられた。

縄文時代に最も多く利用された木材で、弥生時代以降になるとその量は減るものの水湿に強い性質を利用して建築の土台回り、土木用材としては現在まで使われている。石川原宮跡遺跡や富山県桜町跡などの縄文遺跡ではクリの彫刻柱が出土している。



横断面



接線断面



放射断面

写真12 石見型木製品組織断面写真

### Ⅲ. おわりに

第3次調査では釜塚古墳の外部施設について多くの新しい知見を得ることができた。

まず、周濠の外側に外堤が巡ることが明らかとなった。外堤は周濠外縁から5mほどの平坦に整地された空隙地を介して古墳を取り囲むように構築されており、このことは外堤が周濠の護岸、治水のために構築されたものではなく、空隙地を含めた古墳の墓域を明示することを主目的に築かれたことを示している。この外堤部まで御魂の墓域は直径89mに達し、当時西日本地域の円墳としては最大級の規模を有することになる。

墳丘を囲む周濠の北では渡り土堤が確認された。渡り土堤の周辺は常に水を湛えていた状態であったと推定され、周囲は低湿地帯で通路が確保しにくい状態であったことも考慮すれば、渡り土堤は古墳と外部を結ぶ唯一の道路の役割を果たしていたものと考えられる。

外堤、渡り土堤、周濠など釜塚外部に構築された諸施設は、奈良盆地、河内平野など初期ヤマト政権中枢の大型古墳に集中的に採用、付設された施設とされる。近畿地方以外ではこれら施設を付設した古墳の数は極めて少なく、周濠を配する古墳に限定してみても九州では福岡県蒲田町の御所山古墳（5世紀後半）、久留米市の御塚（5世紀末）、権現塚古墳（6世紀前半）などがあげられるにすぎない。釜塚では古墳の築造当初から周濠に水が湛えられていたものと推定され、古墳が地下水位の高い低地に築造された最大の理由は、周濠の構築にあったとみられる。

釜塚古墳の被葬者は初期横式石室の早期採用に象徴的に表される朝鮮半島勢力との強い結びつきを背景に、周濠の構築によってヤマト政権との密着な関係を有する大首長を内外に印象づけたのであろうか。

出土品で最も注目されるのは、近畿地方以外では初の出土となった石見型木製品である。近畿地方で出土している同種資料は4段タイプであるのに対し、釜塚例は最下帯を有しない3段タイプである。また、角状突起も長く又部の切り込みも深いなど、近畿出土例に比べ古い様相を示し、三重県宝塚古墳の船形埴輪の甲板に立てられた威杖や熊本県の姫ノ城古墳出土の石製品に類似する。石見型木製品の山出、変遷を考える上で貴重な発見となった。最近では奈良県の鴨波2号墳主体部から出土した槍先器具との形態上の類似性も指摘されている。これら資料との比較検討を進める必要があろう。

古墳の築造年代について、8トレンチで外堤内側の裾部付近から出土した土師器のうち、口縁下の屈曲部がゆるく丸みを帯びた二重口縁壺は布留式新段附と考えられる。これまで古墳周囲から古式須恵器が出土していないことも考慮すると釜塚の築造時期は5世紀前半まで遡る可能性が高まった。

さて、釜塚古墳の周囲から他地域の弥生土器や韓式土器が出土しているが、糸島地方西部の海岸線の集落遺跡では、中国、朝鮮半島系の遺物が多く出土しており、一帯で朝鮮半島に近い地の利を活かし、玄海灘を介して活発な交流が行なわれていたことは疑いない。

長野川河口の集落も交易に開かれた可能性は高く、釜塚古墳の立地はこれら海上交通の要衝を強く意識されたものと推定される。周辺地区では、港湾遺構の存在等にも十分に想定しながら調査を行なう必要があろう。

## 報告書抄録

フリガナ	クニシセキ カマツカコフン ダイ3ジハクツツチョウサガイヨウ							
書名	国史跡 釜塚古墳 第3次発掘調査概要							
冊数	前原市文化財調査報告書	巻次	第81集	編者名	岡部裕俊 鈴木三男 小川とみ			
編集機関	前原市教育委員会							
発行年月日	西暦2003(平成15)年3月31日							
フリガナ	フリガナ	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	33° 35' 32"	130° 35' 32"	平成13年11月 ～ 平成14年3月	400㎡	重要遺跡 確認調査
国史跡 釜塚	福岡県前原市大字御生字釜塚 403-2, 405番地							
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
国史跡 釜塚	古墳	弥生～ 古墳時代	濠、周濠、外堤、 渡り土堤	弥生土器、石器、土 師、須恵器、埴輪、 木簡		外堤を含めた墓域は直 径89mに達する。周濠 から瓦葺木製品が出 した。		



国史跡釜塚古墳 横穴式石室前壁（1950年）

## 国史跡 釜塚古墳

### 第3次発掘調査概要

前原市文化財調査報告書

第81集

発行 前原市教育委員会  
福岡県前原市前原西一丁目8番14号  
TEL. 092-323-1111

印刷 株式会社重富印刷  
福岡県前原市前原東三丁目1番8号